人生ハンド仏句

第１１３号

Ｈ．２３．８．１

（毎月１日発行）

お盆と、盆おどりのはじまり

住職　谷川寛俊

お盆の月をむかえました。「盂蘭盆経」というお経の中に有名なお話があります。お釈迦様のお弟子に目連（もくれん）という人がいました。目連は心の優しい人で、亡くなってしまったお母さんは今あの世でどんな生活をしているか気になっていました。

ある日、目連は神通力という力をもって、母の住んでいる世界を訪ねました。

最初に極楽からたずねてみましたが、どこにもお母さんの姿は見えません。そこで今度はおそるおそる地獄を覗いてみると、お母さんは餓鬼道（がきどう）という、いつもお腹をすかして苦しむ、恐ろしい世界に落ちていました。目連あまりにも変わり果てたお母さんの姿を見て、大変驚き、どうしてお母さんが餓鬼道に落ちたか調べてみました。するとどうでしょう。

あんなに目連には優しかったお母さんも、人には大変冷たく、欲深い人だったのです。

例えば、これも自分の物、あれも自分の物というということで、人に施（ほどこ）す気持ちが全くなかったというのです。

お母さんはそうした行いで、餓鬼道に落ちていたのでした。

そこで目連は、お茶碗にご飯をいっぱいのせてお母さんに差し出しましたが、手にとって食べようとすると、硬い石ころに変わってしまい、又喉が渇いて水を飲もうとすると熱い炎に変わってしまいます。目連はどうすれば母親を救うことが出来るかと、お釈迦様に尋ねました。

お釈迦様は「あなたの母親の罪はとても重く、あなただけの力ではどうすることも出来ない。これを救うには八月十五日に多勢のお坊さん方が修行を終えます。その修行僧達に飲食を供養しなさい。そうすれば、その功徳によって母親は必ず餓鬼道の苦しみから救われる事ができるでしょう。」

目連はさっそくお釈迦様の言われた通り多勢のお坊さん達に供養の誠を捧げ、その功徳によって餓鬼道の苦しみから救うことが出来たというのです。

現在も法要の後、お参りされた方々に飲食の供養の席を持つのもこの由来によるものです。

これがお盆の始まりです。そして母親を供養して救った目連は大変喜び、思わず回りの人達と踊り出したそうです。これが「盆踊り」の始まりなのです。

又、お盆という字は、皿の上に分けると書きます。

即ち、自分でひとりじめしないで、さあさあ皆さん、どうぞ食べてくださいと言ってに振るまう（供養）事が大切な心なのであります。

今年のお盆は、このような気持ちでお迎えしたいものです。

「人生ハンド仏句」と打ち込んで頂けば、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山　真　成　寺
編　集　部　谷川久仁子
TEL・FAX　0765-22-2268